

ふれあい活力ゆとり

すみだ



将軍の御鷹場 向島

向島は水鳥に恵まれた将軍の御鷹場でした。五代将軍綱吉の時「生類憐れみの令」により鷹狩りは中断されましたが、隅田堤に桜を植えた八代将軍吉宗の時復活しました。御鷹場では將軍の許し無く鳥を獲ることは禁じられ、舟の運行も制限されるなど水鳥の天国でした。百花園を開いた佐原鞠場は『墨水遊覧誌』で雁や鴨は人をも恐れず近寄ってくる」と著しています。掲



載の絵図の鐘ヶ淵は鷺の名所とあり、絵図の右下の丹頂池は、池の中に島を作って丹頂の鶴を放し飼いにした所といわれます（『江戸名所図会』巻之七）。寛永20年（1643）頃には、木母寺境内に鷹狩りの御膳所（休息所）として隅田川御殿が建てられました（『御徒方日記』）。この御殿は、鷹狩りの他に賓客の饗応の場としても屢々使われました。向島は「名にしおは、いさこと、はん都鳥わか思ふ人はありやなしや」の業平の歌や、謡曲「隅田川」で知られる梅若丸伝説の舞台であり、都人にとり、武蔵野といえは隅田川であり、隅田川といえは都鳥であり、梅若丸伝説でした。寛保のはじめ（1748）、靈元上皇は吉宗の歌の師冷泉院大納言為久が江戸に下る時、都鳥を考察したので写して来るように頼みます。将軍は、隅田川の綾瀬のほとりて大小の鴨を鉄砲で撃ちとらせ、絵師に写生させて応えました（『有徳院殿御実記附録』）。江戸の庶民は都鳥とは鴨の事だと知っていますから「鴨だといふと名所とならぬとこ」などと川柳に詠んでいます。

人扶持を頂戴した植木屋半右衛門であり、御殿跡で料理屋を営み、繁昌しました。植半の先の水神とは隅田川神社のことで、洪水の時もこたは沈まないの浮島と呼ばれていました。この南側（絵図では左）が古街道の宿場として賑わった隅田千軒宿の跡です。「たつね来てとは、こたへよみやこ鳥すみたかはらの露ときえぬ」と、業平の歌と呼応するような歌を残して亡くなった梅若丸の伝説を残したのも、こうした宿場の人たちだったことでしょう。梅若丸の縁日3月15日に江戸の人々が集まるようになったのは、江戸開府頃すで見られ、『慶長見聞集』巻之七には「謡に作りたる梅若丸の塚有て、しるしの柳有、見物衆は塚あたりの芝の上に圓居して、歌をずし、詩を作り、酒もりする」とあります。家光が正保4年梅若の縁日を検分させたときは、門の内外に数千人の参詣人が集まり、隅田川は大小の舟で充滿したといわれています（御日記）。

隅田川御殿の対岸の中州は閑屋の庭といわれ古くは千住から地続きでした。一般には浅草から見て対岸一帯を向島と呼んだのですが、将軍は、御殿の対岸にある閑屋の庭を向島と仰せられていた、と『隅田川叢誌』にあります。その庭には明暦の頃（1655）から御前裁畑（現在の梅若橋付近）がありました（葛西志）。『十方庵遊歴雜記』を著した釈敬順はその初編でこの御菜園を「公の召上がり賜う御野菜をはじめ、真桑瓜、西瓜の類まで作りて奉る処也」と説明しています。近隣の百姓が作り、隅田村の名主坂田家が世話をしていました。さらに、敬順は中央の平山に登り「閑寂として唯松風の音をのみ聞き、遙か南を眺望すれば両国橋まで見渡たせる」と、その絶景を賞賛しています。

向島の自然環境は御鷹場という將軍の威光に守られたといってもよく、明治20年になると、かつての御前裁畑のあった辺りは鐘淵紡績工場となり、明治29年には天野車輛工場も出来て江戸の傍は無くなりません。現在は工場も撤退し、都の防災拠点都市計画に基づく団地群が屏風のようにならと建っています。この防災団地の建設にともない、昭和51年、梅若伝説の寺木母寺は現在の梅若公園の付近から200mほど西に移築されています。この辺りは大きく変貌しましたが、歌に詠われ、都人の関心を集めた都鳥は、現在も都民の鳥ユリカモメと親しまれて、隅田川に姿を見せています。

（墨田区文化財調査員 松島 茂）

掲載絵図：「武蔵第一名所角田河絵図並古跡附」（部分）文化初年（1804-1817）頃（すみだ郷土文化資料館蔵）

あなたのまちの歴史を探る ～向島地域を舞台とした実践～

NPO法人向島学会 佐原 滋元



「道に埋まる石臼」 なぜか道の中に石臼が。向島で多い、私有地を道路に提供した証しの残渣か？

私ども「NPO法人向島学会」で取り組んできた、自分たちのまちの歴史を探る事業の報告をさせていただきます。

私どもは、平成24年度、すみだのまち発祥の地とも言える、鐘ヶ淵地域(旧隅田町)を探る「みち(道・未知)との遭遇」と題した事業に取り組みました。平成25年度は、鐘ヶ淵地域に隣接する、旧寺島町地域を探る「寺島のまち歴史掘り起こし隊」と題した事業です。いずれの事業も、墨田区で新しくできた、「すみだの力応援基金」という助成事業を使わせていただき実現できました。

「みち(道・未知)との遭遇」は、鐘ヶ淵地域に現存する、古代にできた「古代の官道」、鎌倉時代にできた「鎌倉街道下の道」、江戸時代にできた「墨堤通り」、大正時代にできた「鐘ヶ淵通り」の4本の道を、時代の流れを整理する手がかりとして、各々の時代の由緒が残る場所を訪ね、その時代の鐘ヶ淵地域をイメージしていた、ということに興味です。

当初は、12月15日に隅田小学校に集まった子供達が4グループに分かれ、各々のコースを巡る予定でしたが、あいにくの雨と寒さで、まち歩きを断念し、視聴覚室で現地写真を見ながら、図版を使った解説の「バーチャ

ルまち歩き」となりました。2月には「まとめの会」として、大人も含め、目白大学の鈴木章生教授に「江戸の文化と隅田川」と題した講演をいただきました。その後、参加者も含め、思いついた話や、まちの歴史を子供達に伝える意味などを討論しました。

事業の成果として、誰でもがまちの歴史の解説ができることを願い、各々のコースの「解説紙芝居」を作成しました。

「寺島のまち歴史掘り起こし隊」は、旧寺島の町内を、5地域に分け、様々な形でまちに残された歴史の断片を探し出そうという趣旨です。

延べ参加者86人が、合計10時間以上かけて、まちの隅々まで歩きました。

「まち歩き報告会」では、そのまち歩きの様子をスライドショーにしてご紹介し、墨田区文化財調査員の松島茂先生から、寺島の歴史を探るためのさまざまな資料とその利用方法を教えていただきました。その後、参加者による座談会で、歴史の中の寺島を語り合いました。

最後に、これらの成果を、皆さんにも体験していただくとう、寺島地域の歴史的なエピソードを整理したリーフレットを作りました。

今回の地域学セミナーでは、



「元寺島図書館」
寺島村の人達が初めて作った寺島小学校の場所。府立七中(現都立墨田川高校)の最初の授業が行われた場所。昭和天皇即位記念事業として、まちの人達は図書館を作った。

これらの事業の概要説明の後、向島学会内で中心的に関わった、高木新太郎氏と阿部洋一氏が、「あなたのまちの歴史を探る」というテーマで座談をおこないました。

話題は、これまでの実践で再発見したことや、注目しなければいけないことにはじまり、江戸時代のブランドだった「寺島茄子」の復活をまちの活性化に活かす活動や、児童遊園で収穫されるサクランボを子供達の思い出づくりとして、これからの歴史を作る試みなど、自分の育ったまちの歴史を学ぶ意味や、その活かし方などに話が及びました。

このレポートでは、私たちが、まちの宝になると考える、皆さんの歴史的なエピソードを、

一つ一つご紹介することができず申し訳ございません。

私たちは、まちの一人一人の営みがまちの歴史を作り、まちの文化を育んでいくのだと考えています。歴史をふまえないまちづくりは、ともするとまちの文化を破壊することにもつながります。

そのためにも、ぜひ、自分たちで、過去のまちの歴史を探り、すみだの豊かな未来のために活かしていただきたいと思います。



「真光寺」 まちの中に残る墓所。蓮花寺の末寺、長浦神社の別当。隣のこども広場には本堂があった。